

hokkeshugishu.pdf

天台学入門書としての「天台四教儀」と「天台法華宗義集」

Paul Swanson

天台学入門書としての「天台四教儀」と「天台法華宗義集」

Paul Swanson

日本では諦観の「天台四教儀」を天台学の専門要語の習熟のための入門書として用いることが、長い伝統に基き、常識と成っている。しかし、日本天台宗は、義真によって著わされた入門書「天台法華宗義集」をも有している。義真は伝教大師最澄の同輩であり、日本天台の第二祖にあたる人で平安

時代初期に天台入門書として「天台法華宗義集」を著わしたのである。しかし、なぜこの書物が撰述された頃からほとんど使用されずにきたのか、私には不思議に思える。「天台教学の研究」で関口真大先生も「天台法華宗義集」は、「その成立の由来から見ても、日本天台宗の用うべき天台学入門書として最もふさわしいものである。」と主張しておられる。^③

しかし義真の「宗義集」は、その時代に求められていた密教とか、日本天台宗の成立にとって重要であった菩薩戒の問題等には、ふれていない。又、義真の死後、日本天台宗の指導権が円澄にわたり、その後は円仁の活躍が目覚ましいもので、義真の学流は盛んでなかった。^④ そのような背景により

「天台法華宗義集」が一般に使われなかったのではないかと思われる。その理由はさて置くとして、「天台四教儀」と「天台法華宗義集」を内容のみから比較すると、どちらが天台学の入門書として適しているのだろうか。まずそれぞれの内容から見よう。

「天台四教儀」は、大正大藏経に収められ、約六頁の長さ^⑤で、「五時八教」の天台教判を中心にして天台の教学を紹介する手短かな入門書である。ほとんどの内容が、この五時八教の教判に絞られ、巻末に天台の修行法について少し触れ、「二十五方便」と「十乘観法」を紹介している。短かくて、非常によく整理された入門書である。

「天台法華宗義集」は所謂「天長六本宗書」或は、「天長勅撰」の一つで、空海の「十住心論」等と共に天長七年（西暦八三〇年）頃に勅撰し、上進されたものである。その内容は「天台四教儀」の三倍くらいの長さで、大正大藏経の十九頁を占める。^④ これは義真が書いたというよりも、ほとんどが

天台大師の「法華玄義」や「摩訶止観」（及び湛然の注釈文）を撰述、引用し問答体にしたものである。内容としては大きく「教門」と「観門」に分かれている。まず義真の序文のあの「教門」は、①四教②五味③一乘④十如是⑤十二因縁と⑥二諦の六部に分かれている。「四教」と「五味」では天台の教判を扱い、藏・通・別・円の四教と「涅槃経」の乳・酪・生酥・熟酥・醍醐の五味の比喩をもとにして、天台大師の「法華玄義」や「四教義」を引用し、天台の教判を紹介している。まず藏・通・別・円の四教の教判によって、仏法の内容を総轄し、根本的に仏教の様々な教えには矛盾がないことを強調する。この部分は「天台法華宗義集」の中で最も細かく論ぜられるところで、大正大藏経の五頁以上、次の「五味」の部分を含めれば全体の約三分の一を占める。⁵³「涅槃経」から借りた「五味」の比喩も天台思想にとって重要な意味を持つ、仏陀は真理を明すために様々な教えと手段を使用するからである。故に義真は言ひ、「夫至理絶言必假言而会理。道非詮浚寄詮汲而分階。是以忍士蒼生借八弁而開譬。」⁵⁴理そのものは言語で充分表現できるものではないが、仏陀は「華嚴経」や「阿含経」から「法華経」までに表わされている教えを通して、これを明かそうとした。この思想は天台学の教判であり、「天台法華宗義集」では、これを「四教」と「五味」の概念で説明している。

天台学入門書としての「天台四教儀」と「天台法華宗義集」(Swanson)

次に「法華経」に基づく「一乘」の思想と「十如是」の三転読によって「一念三千」や「百界千如」の天台実相論を説明する。天台宗は「法華宗」と呼ばれるほど「法華経」がその中心的な經典である。その「法華経」の中核と成る一乘思想を義真は「四一」の概念を引用し説明する。⁵⁵真理の世界は、この世を超越した別なものではなく、同体・不二のものである(理一)。仏陀の教えは矛盾せず、根本的には統一されているものである(教一)。仏教の修行は皆が結局、仏陀に成るための行為である(行一)。仏陀に成ることが、人間の最終的な目的であり、運命である。(人一)これは「法華経」の思想であり、天台思想の欠かせない教えである。

最後に天台独特の「空・仮・中」の三諦思想の立場から「十二因縁」と「二諦」を解釈する。「十二因縁」は①思議生滅、②思議不生不滅、③不思議生滅、④不思議不生不滅の四重的なパターンで解釈する。⁵⁶これは、四教、四種四諦等に相当するものであり、天台大師の「天台三大部」を貫くパターンでもある。これを理解せずして、天台の思想は把握できないといっても過言ではない。この四重的パターンは、三諦の基である「中論」の「三諦偈」⁵⁷にも見られる。①「衆因縁生法」②「我說即是空」③「亦為是假名」④「亦是中道義」がそれである。この空・仮・中の三諦思想によって、天台大師は中国で論争されていた俗諦・真諦の二諦の解釈を「有」

と「無」の二元的な壁を乗り越え、二諦の正しい解釈に成功した。この重要な「法華玄義」の内容、所謂「七種二諦」の説は義真によって「天台法華宗義集」に詳しく取り上げられている。¹⁰⁾

これら「教門」の部分は、ほとんど「法華玄義」の引用文から構成されている。

説明不十分ではあるが、「天台法華宗義集」の包含するテーマを次々と取り上げてきた。それによっても、この書物の幅広い内容が窺える事と思う。

次に「観門」は天台の修行法を①常坐三昧②常行三昧③半行半坐三昧④非行非坐三昧の「四種三昧」と①見思の惑②塵沙の惑③無明の惑の「三惑」の二部に分けて説明するものである。この部分は主に、「摩訶止観」からの引用文である。そして、「天台法華宗義集」は、義真の偈で結ばれる。

さて、この二書を比較するために、その構成、難易度、そして天台学への紹介の書としての正確さに、目を向けてみよう。

構成では「天台四教儀」の方が非常に簡潔でよく纏まっている。しかし、内容的には、ほとんど五時八教の教判に限られ、天台哲学の幅広い哲学を十分に取り入れていない面がある。「天台法華宗義集」の方は長く、扱いにくいところがあり、又、「四教」と「三惑」の部分で内容が少し重複する箇所

所がある。例えば、両部分に十地等の行位の説明が有り、「天台四教儀」ほど、うまく纏まっていない。¹¹⁾しかし、前述の通り、「天台法華宗義集」には「天台四教儀」に見られない「一乗」、「十二因縁」、「二諦」や「四種四味」が詳細に解釈されている。

難易度では、もうすでに幾度か触れているように、「天台四教儀」の方が簡潔で、分りやすく、纏まっている。又、昔からの注釈書が多く、現代に於いても、稲葉円成先生の「天台四教儀新釈」を始め、数多くの参考書が入手しやすい状態である。一方、「天台法華宗義集」は難解な箇所が少なくない。例えば、「二諦義」の部分等、オリジナルの天台大師の文書のそれでさえ難解な所を、さらに省略したのであるから、非常に分りにくい箇所がある。又、「十二因縁」の部分で、折角「四種十二因縁」を紹介した後、その内容を明白にせず、「縁起」と「縁生」の相違についての、あまり実のない論議を展開している。¹²⁾ 文書を問答体にしたことによつて、分かりやすくなった事は確かだが「天台法華宗義集」だけでは、引用部分が不明瞭なせいで天台大師の「法華玄義」や「摩訶止観」等の文脈を知らなくては、理解しがたいところもある。

天台学の正確な入門書としては、「天台法華宗義集」は天台大師の文書を直接引用しているので、誤った解釈をする危

険性は少ない。この撰述のものは、ある意味で、ただ鈔と糊で天台大師の文書を抜粋し、貼り直しただけで、創造性に欠けていると批判出来るが、却って想像力豊かに、新しい思想的な展開を志さずものは入門書としてふさわしくない。この意味で、「天台法華宗義集」は入門書として非常に正確なものと云える。「天台四教儀」は一方的に、五時八教の教判を中心とする天台学入門書である。「天台法華宗義集」も序文に於いて「四教と五味の首先に局する所以は、此れ則ち一代の教綱、一門の義府にして、余法多しと雖も此れ従り出づればなり。」と教判を重んじることが、これは「四教五味」の教判であり、「五時八教」とは少し異なる。この天台教判問題は関口真大先生や、佐藤哲英先生等により、すでに詳しく論じられて来た問題であり、私が付け加える事はない。ただ一つ感じるのは、「五時八教」の時間的、歴史的な解釈より「四教五味」の非歴史的、仏法そのものの展開と教判の解釈は、現代人により受け入れやすく、理解しやすいものではないかと思う。換言すれば、五時の教判は釈迦仏の八十年の歴史的な生涯を強調する。菩提樹の下で悟りを開いた直後に「華嚴経」を説き、その後、鹿苑へ行き「阿含経」を説き、晩年の八年間に「法華経」を説いたとする時間的、歴史的な解釈は、現代の学者にとり認め難い。一方「四教五味」の教判は仏法そのものの展開、仏典に於ける箇々の教えの相互の

関係を説明しようとするもので、先に触れた天台思想独特の四重的パターンに相当する。最初の「乳」は「華嚴経」が代表する仏教でいう諸法の相互関係等の教義を指す。「酪」は「阿含経」の小乗的無我や因縁の思想を示し、これは理解のレベルの低い人のために説かれた教えであり、所謂「方便」である。これは「四教」で言えば「藏教」に当たり、三諦説の一行目の「因縁」に相当する。「生酥」は「般若経」が代表する大乘の「空」の思想を指し、通教と三諦内の「空」に相当する。「熟味」の教えは「空」を「無」とした偏った理解を避け、存在を「仮名」として認める菩薩の知見である。これは別教と三諦の「仮名」に相当する。最後の「醍醐」は「因縁」「空」と「仮」等を正確に悟る「中」の智慧であり、これは円教・中道に相当する。このような見解は、時間的な「五時八教」に比べ、天台の教判を現代にも生かすものとする。「天台法華宗義集」にも五時の教判が見られ、「天台四教儀」にも五味の教判は有るが、「天台法華宗義集」が四教五味の教判を強調している事は、重要な意味を持つ。天台学は、長い歴史の中で様々な展開して来たものである。中国では、天台大師により明確に説き明さなかった問題や、残された課題を湛然や知礼等が取り上げ、「非情仏性」や「性悪説」といったテーマが論ぜられた。そして山家派對山外派の論争によって天台思想の新しい局面が開かれた。日

本天台宗も、天台学（止観業）のみならず、密教（遮那業）や、律（菩薩戒）等を取り入れ、独自の展開を繰り広げた。このようなテーマを説明していく天台思想史も興味深いものであるが、「天台学」と言えば、まず、天台大師自身の思想を中心となし又、根本とすべき事は言うまでもない。その天台大師自身の思想を直接知る上で「天台法華宗義集」は非常に便利であり、その意味では「天台学入門書」というよりも、「天台大師の教学入門書」として初期天台学を知る上に勝れた性格をもつ。

結論として、「天台四教儀」の方が簡潔で使い易いため、天台学要語等に慣れるには、最も便利な入門書である。しかし、この書はあくまでも「五時八教」の教判を中心とするものであり、天台学の他の勝れた思想や修行法について、ほとんど触れていない。其為、現在、天台関係の英語で出版されている参考書も「五時八教」を強調し、これが天台のアルファでありオメガであるかの様な偏った印象を与えている。一方、義真の「天台法華宗義集」は難解な箇所も多く、理解を助ける参考書もない。従って初心者にとって使い難く、不明瞭な箇所が多い事は確かである。しかし「天台四教儀」より幅広く天台の思想と修行法を解釈し、また天台大師の文書を直接紹介している。日本の天台学者に、この「天台法華宗義集」の難解なところを明らかにし、詳しい注釈書を編纂し、

この書物が天台学の入門書として使い易くなるようにと、お願いしたいところである。

- 1 関口真大著「天台教学の研究」684頁。
- 2 中尾俊博著「日本初期天台の研究」252と256頁。
- 3 大正大藏経46、774と780頁。
- 4 大正大藏経74、263と281頁。
- 5 大正大藏経74、263中と269上。
- 6 大正大藏経74、268中。
- 7 大正大藏経74、269上。
- 8 大正大藏経74、272下。
- 9 大正大藏経31、33中。
- 10 大正大藏経74、273下と276下。
- 11 大正大藏経74、266中と下、280下。
- 12 大正大藏経74、273中・現代の視点から見れば、「縁起」と「縁生」は両方梵語の同語 *pratyasamutpada* の漢語であること
を知り、その「相違」を論じるのは不思議に思える。
- 13 大正大藏経74、263中。
- 14 安藤俊雄著「天台学、根本思想とその展開」299と371頁。
(ウィスコンシン大学・Ph. D.)